

発行：社会福祉法人 くまもと障害者労働センター 〒861-8039 熊本市東区長嶺南1-5-4の  
TEL: 096-382-0861 FAX: 096-285-7755 <http://1985orange.com>



# あれから2年

## ～私たちは忘れえない～



美味しそうなオードブル



倉田さん一言

### ～にぎやかに、今年も花見ができました。～

4月7日に、近隣の放課後デイサービスの3事業所とおれんじ村での大花見大会を行いました。長嶺南中央公園(あぶみだ公園)での予定だったのですが、今年も残念ながら雨で身体障害者福祉センターとなりました。(ここ数年ずっと雨です。きっと雨男がいるせいです。)ちなみに、おれんじ村のK施設長は、長嶺南中央公園に行ったらしく遅刻をして花見会場に到着しました。

私はおにぎりを作る人たちへ取材をする記者だったので、はりきって前日から質問を考えていました。しかし、実際は100名近くの参加者の食事を作らないといけないため、忙しすぎて質問ができない雰囲気、私は

取材をあきらめてその場から逃げ出してしまいました。

日頃お弁当を頼んでくれる皆さま(子どもたち)を招待するため、みんなでバタバタ準備をして力を合わせて作ったオードブルとおにぎりはとても美味しかったです。食後は、ビンゴ大会をしました。放課後デイサービスの子どもさんたちが、とっても喜んでくれて大いに盛り上がりました。最後になりましたが、熊本地震から2年、全国の多くの方々にご支援いただき今年もみんなで花見を楽しむことができました。

みなさまからいただいたご支援を忘れず、これからもゆっくりと「おれんじ村」らしく歩んでいきます。

岩尾 将 史



# あの時何が

## 熊本を襲った大地震

2016 年

4 月 14 日 16 日

2016 年 4 月 14 日、16 日に熊本にでっかい地震がやってきた。  
 私たちは、どぎもをぬかれた！！  
 その時の「おれんじ村」と「村民」がどう過ごしたのか…。  
 2016 年 6 月に、様々な葛藤の中で書かれた文章が見つかりました。  
 ぜひ、みなさまご一読ください。

### ◆わかつとる。だけど…。家に帰りたい◆

くまもと障害者労働センター（以下：おれんじ村）から帰ろうとした時だった。4 月 14 日 21 時 26 分、熊本にでっかい地震が襲った。初めて体感する揺れに、何が何だかわからない。立ってられない。床に這いつくばり、揺れが止まるまでの間、家族の顔が浮かぶ。「早く家に帰らなん…」。揺れがおさまると同時に、外に飛び出す。近所の人みんな外に出ている。静かな住宅街が騒然となった。まずは、幼い子ども 3 人と妻の安否を。家族に電話する…。電話回線が混雑しななかつながらない。何度も電話を繰り返し、やっとつながり安否確認できた。一安心するも、僕の気持ちは、「なんさん、はよ家に帰りたい。子どもたちに会いたい。」。そこに、一通のメールが。北海道の共同連のなかまからだ。「大丈夫ですか？」すぐに、「大丈夫です。」と返事を送る。「まずは、なかまの安否確認ですね！」と返ってきた。わかつとる。だけど…。家に帰りたい…。



地震直後のカフェ

かった。

メンバーの家に行く途中、緊急地震速報が鳴り続け、道路はボコボコ、道の真ん中で水道管が破裂し水が噴水のように

おれんじ村に残っていたスタッフと安否確認のためメンバーの家へ訪問するため、その場を別れた。メンバーの家を周りながらも、子どもたちのことばかりが気になる。メールが余計に思えて仕方な

吹き出し、運転しながら、このまま熊本はどうなるのだろうと不安ばかりが頭をよぎる。一通りメンバーの家の訪問が終わり、家にたどり着こうとした時、一人安否確認を忘れていた。



自宅近くの民家。この下に一家 3 人が生埋めに…

「やっと帰れると思ったのに…。もう、こんな状況だから訪問しなくても…。」一瞬そう頭の中をよぎる。「えーくそ。」と、車を引きかえす。やっ

と安否確認を終えて、自宅に帰り着くと、辺りは真っ暗で、いつにない静けさが怖かった。

玄関のドアを開け、電気をつけるが、すでに停電。携帯のあかりで、家の中へ。テレビは倒れ、物が散乱していた。寝室に入ると、母子 4 人が身体を寄り添っている姿に涙が溢れた。しかし、その後も地震は続く。地下から押し上げるような地響き、家のきしむ音の恐怖から、子どもたちを抱え、一日目の車中泊が始まった。子どもたちは、日常と違う車中泊を無邪気に楽しんだ。子どもたちの姿に、僕は救われた。

しばらくし、地域の消防団に参加。古い家が多く、高齢者が多い地区のため、一軒一軒安否確認に回る。消防団の活動中も、地震はおさまらず、深夜にまたでっかい地震がおきた。電柱から火花があがり、夜空を一瞬青白く染めた。恐怖とともに、絶望に襲われた。消防団を終え、家族のいる車へ向かう途中、上空から今までに聞いたことがない台数のヘリコプターの飛行音が響き渡り、地震の被害の大きさを物語っていた。

## ◆片道 20 分が 2 時間以上もかかった◆



神社の塀が崩れている様子

4 月 15 日ほとんど眠れず、朝をむかえる。子どもたちの小学校、保育園から休みの連絡があり、子どもを連れおれんじ村に出勤。出勤の途中、妻の仕事場が益城町（一番地

震が大きかった場所）だったので、妻を送っておれんじ村へ。橋という橋が通行止め、道も大きな亀裂が生じていた。何度も何度も迂回し、やっとのことで益城町へ。そこは想像を絶する光景で、現実をなかなか受け止められなかった。電柱・家は大きく傾き、倒壊した家が道路をふさぎ、地震の状況を伝えるテレビ中継車が何台も停まっていた。片道 20 分の通勤が 2 時間以上もかかった。

出勤後、事務所や作業場などの被害状況を確認。物が散乱している以外、大きな被害は見受けられなかった。この日は自宅の片付けと子守りのため帰宅する。夜も余震が続いたが、さすがに、昨日のような地震はないだろうと、自宅を簡単に片づけビールを片手に、いつの間にか眠りについた。

## ◆さあ、これから 40 人どうやってメシ食うか◆

4 月 16 日 1 時 25 分 『どおーん!!』という地下から押し上げるような地響き、家のきしむ音、14 日より大きな揺れが襲った。子どもたちを探し（寝相が悪く、みんなバラバラに寝ていた）、1カ所に集め身体ごと 3 人の上に覆いかぶさり、地震がおさまるのを待った。しかし、地震は一向におさまらず、外からは消防車のサイレンが鳴り響いていた。「子どもたちをどうやって守ろう。」ただ、それだけを考え、地震のおさまるのを待った。この間の数分が、本当に長く、怖くて怖くてしようがなかった。一家全員の死をも意識した。地震が少しおさま



益城町の様子

り、子ども 3 人を抱え車へ飛び乗り、二日目の車中泊。さすがに今度の地震は、子どもたちもわかった。無邪気に車で遊ぶ姿は見られず、静かに地震の恐怖に耐えて

いた。その姿が、痛々しく切なかった。

メンバーの安否確認は、近所に住むスタッフが行ってくれた。僕は消防団に参加、高齢の人たちを町の避難所に誘導した。30 世帯ほどの地区の多くが倒壊し、大きく傾き今にも倒れそうな家が何軒もあった。道路も車が通れない状況で、もう諦めというか、今後の生活など考える気にもなれず、ただただ地震の大きさに呆然とするしかなかった。

夜が明け、妻を職場へ。益城町は前震よりもすさまじい光

景だった。本当に、熊本は大丈夫なのか。アンパンマンを楽しそうに観る子どもたちの横顔を見ながら、家族でどこかに逃げ出したいと何度も考えた。おれんじ村に着くと、集まったみんなの顔が疲れ果てていた。『さあ、これから 40 人、どうやってメシ食うか』と…逃げだしたい気持ちと 40 人のメシをどうしていくかという間で、前向きになったり、悲観したりの繰り返しだった。

## ◆無理にでも楽しくしないと気持ちが続かなかった◆

おれんじ村の多くのメンバーは避難所に行くことができなかった。おれんじ村を避難所として開放することに決め、おれんじ村避難所の開設となる。

一日目は、みんな地震の恐怖はあったものの、みんなで過ごす安心感と非日常の中で、なんとなく楽しい雰囲気（無理



おれんじ村避難所

にでも楽しくないと気持ちが続かなかった)で、夜はパーベキューをしようと盛り上がった。しかし、実際にはライフ

ラインは途切れ、余震も続いており、まずは水の確保が必要だった。飲み水だけでなく、トイレなどの生活用水も含めて確保しなければいけなかった。みんな水をかき集めてまわり。夕方になって、妻を迎えに行くため、みんなと別れ帰宅した。(実際は、疲れてパーベキューもできなかった。)

家に帰っても、ライフラインは途切れていた。家族 5 人ライトの灯りで、おにぎりを食べた。味も薄く美味しくなかった。地震後、毎食おにぎりばかり。子どもたちは飽きてほとんど食べない。もちろん、僕も飽きていたが他に食べ物もなかった。食べたらずぐに車に乗り込み、眠りに就く。しかしなかなか寝付けず、子どもを寝せ、なまぬるい缶ビールを片手に近所の被害状況を確認するように散歩した。この日も、無数に飛ぶヘリコプターの飛行音が夜空に鳴り響いていた。

## ◆不自由でしようがないけど、みんなで生きていることを感じる日々◆

4 月 17 日朝から、おれんじ村に出勤。おれんじ村に宿泊し



おれんじ村避難所

ている人が約 10 名。建物の状況だけでなく、余震も続き夜間一人になる怖さから、しばらくはみんな自宅に帰れそうになかった。そ

地震後の  
おれんじ村の  
愛言葉です

# 雨にも負けず 風にも負けず

ここで、1週間、おれんじ村の仕事は休むことに決めた。家族が仕事で不在になるので昼間だけおれんじ村に来る人、反対に、昼間はヘルパーが入り自宅を過ごし夜間だけ泊りに来る人など、多くの人がおれんじ村避難所に集まった。

おれんじ村の休み期間は、電動車椅子の人は近所のスーパーに買い出しに、その他水を確保に行く人、一人暮らしのメンバーの家に片付けに行く人、しばらく仕事もないのでSOSチラシを作成しポスティングを始めるため、チラシ作りをする人にわかれ、その日その日をみんなで過ごしていた。生活は、不自由でしようがなかったけど、なんかみんなできていることを感じる日々だった。

## ◆被災地センターの設立準備が始まる◆



被災地センターの準備会

4月18日から、徐々に全国から避難物資が届き始め、おれんじ村に訪問する人たちも増えてきた。また、この日に、ゆめ風基金からも来熊され、被災地センターの設立準備が始まった。そして、この日から僕のおれんじ村避難所生活がスタート。(地震後すぐにみんなと一緒に泊まってくれていた人は、10月に体調を壊してしまいました。本当に無理してがんばってくれました。面と向かってはなかなか言いませんが、機関誌でなら言えるかな。本当にありがとう。)

僕のおれんじ村避難所生活の初日は、眠れん。落ち着かん。じっとしとられん。みんなが寝静まって、こっそりコンビニへ。商品棚はすっからかんで、お菓子とお酒だけ並んでいた。ビールを買い、一人でビールを飲んだが眠れず、その後もお酒を飲み続けながら、おれんじ村の今後のこと、40人のメシはどうするか、被災地センターの設立に向けておれんじ村がどうかかわっていくかということ朝まで考えていた。

その後は数日毎に、被災地センターの設立準備の会議が進められていたが、なかなか会議には参加できなかった。おれんじカフェの建物が倒壊するとの情報でみんなで冷蔵庫などの電気製品を移動させたり、食糧や生活用水の確保、来客者・電話への対応、支援物資の仕分け・配達などなど、



全国からの支援物資

いろいろなことがありすぎて毎日ばたばただった。被災地センターは設立に向け、なかなか専従で働ける人が確保できずに足

踏み状態で、おれんじ村から一人専従者を出せないかとの声もあった。しかし、目の前のことで手一杯、先のこととも考えられない、ただただ不安でしようがない僕は、即答で「無理です。」と答えるしかなかった。

長くなる避難生活では、少しでも快適な生活をと、マッサー



プレハブ到着

ジ屋に行ったり、僕の自宅にみんなを呼んで入浴(おれんじ村より早くライフライン

インがつながった)したり、些細なことをみんなで楽しんだ。そして、避難生活で一番印象に残っていることが2つある。1つは、生活用水を確保するため、雨の日にポリバケツを外に並べ雨水を溜めながら水溜りの水も汲んで生活用水を確保した。水溜りの水を汲んでいる時もおれんじ村の今後の仕事などがんするかばかり考えていたこと。最後に、男は小の時は外ですと決めていたのに、毎回きちとトイレで用を足し大切な水を流す障害のあるメンバーに怒っていたこと。今考えると笑ってしまうが、本当にその時は余裕がなく、どうしてもトイレで用を足すメンバーを許せなかった。

おれんじ村の休業期間は、おれんじ村避難所と車中泊をく

# 熊本が強い 地震にも負けない おれんじ村に 私たちはなりたい

り返し、毎夜一人でお酒を飲みながら、自分にできることを考えていた。いつしか、僕にできることは、おれんじ村のみんなの仕事を作り、収入を確保することだとはっきりしてから、ただただ仕事を作ることにだけに集中した。まずは、今までやってきたこと、お菓子作りをどうにか再開することを考えた。しかし、事務所は避難所に、おれんじカフェは倒壊の危険性があり使えず、事務所の外には支援物資が並び、どこも使える場所がなかった。新たな場所を求めても、地震の影響でどこも貸してもらえない物件はなかった。そこで、おれんじ村隣接の駐車場を借りて、その上にプレハブを建てることを思いつく。すぐに実行、多くの人の協力を得て5月からプレハブが使用できることとなった。事務所の荷物をプレハブに押し込み、どうにかお菓子作りの目的がたった。しかし、販売先の熊本県内はみんな被災している状況で、お菓子が売れないことはすぐに想像できた。これを機会に全国に売り込もうと、全国のなかまに連絡をし、販売の協力をお願いした。販売のためにはチラシが必要だと思い、それからはどれだけインパクトがあるチラシを作るかを考え、大好きな宮沢賢治の詩を使った。

## ◆くじけそうなココロ なかまとのつながり◆

いよいよ4月25日(月)から、10日ぶりにおれんじ村の営業がスタート。電話では話していてもメンバーの一人ひとりの顔を見て、安心した。みんなの顔を見て安心したのも束の間、おれんじカフェもまいペース(4月から熊本市所有の施設内で営業を開始した喫茶店)も使用の目的が立たず、約40人がおれんじ村の狭い事務所に集った。息もできないほどのすし詰め状態。作業する場所もない。その前に、まず仕事がない。お菓子作りがスタートするまで、休業中に作ったSOSのチラシを近所にポスティングしたり、おれんじ村に集まった支援物資を配ったり、ブログの配信、事務所の軒下で青空カフェを始めたりと、外への情報発信を意識した活動を中心に進めた。

それと同時に、お菓子のチラシ作成と、いろんな場所、個人に直接手紙を書いたり、来客者など、誰彼構わずお菓子の

販売の協力をお願いした。おれんじ村の中でも、震災を使って営業することに好意を持ってない人もいた。でも、『今はそんなこと言ったらねん。みんなの仕事を確保して、お金を稼いで生活を守らな。なんばいいよっかあ。』と、腹をたてながら、がむしゃらに仕事作りに奔走した。

昼間、狭い事務所に大勢が集まり、いたるところで喧嘩がおこり、仕事作りもなかなか進まず、夜は避難所生活というストレス限界の時期に、全国のなかまが熊本入りし、一緒に避難所生活を過ごしてくれた。毎日、朝・夕の食事を作ってもらい、夜にはお酒をおごってもらい、夜遅くまで一緒に飲んだ。全国のなかまと何日も一緒に泊まって話をする時間は、本当に楽しく貴重な時間だった。

その後も、全国からたくさんの方が来てくれた。全国のなかまと一緒にご飯を食べたり、お酒を飲んだりする時間が、とても楽しかった。そして、何よりもくじけそうな僕を支えてくれた。

## ◆おれんじ村始まって以来の忙しさ!◆

5月9日より、ようやくお菓子作りがスタートした。本当に注文があるのか不安でしやうがなかった。数日間は、ほとんど注文もなく、先行き不安で押しつぶされそうにもなった。しかし、みんなの前では『大丈夫。全国からたくさん注文が来るけん。待ってけ。』と強がるしかなかった。その後、徐々に注文は増え、全国ニュースでも取り上げられ、おれんじ村始まって以来の忙しさとなった。共同連をはじめ、全国のみなさまからのご支援で、毎日40名がおれんじ村に集まり、けんかしながらもお菓子を作り、働く喜びを感じている。

## ◆いま、おれんじ村は元気です◆

6月には余震も減り、少しずつ以前の生活に戻れるかと思った矢先に、記録的な豪雨が続いた。その時は、本当に心が折れそうになった。しかし、この時も全国のなかまの応援が支えになった。みなさん。「いま、おれんじ村は元気です。」

熊本地震の後、つらくて何度も逃げだしたくなりました。心が折れそうにもなりました。その度に、全国のみなさまに助けられ、励まされ、なんとか今があります。本当にありがとうございました。  
2016年6月

いっしょに発展しても  
人は自然に勝てない  
だから人は助け合おう

もーだめかと思った…  
でも、みんながいるから  
がんばれた

# 感謝

私たちの笑顔は  
みなさんのおかげ

大変だった  
でも強くなれた

これからも、一致団結して頑張るぞ



普通の生活が  
懐かしかった

あったかい  
おにぎりが  
最高に  
美味しかった

ありがとう

絶望の中で  
生きる意味  
働く意味を  
知りました

知らない人と  
いっぱい  
ともだちに  
なれた

蛇口をひねれば水が出る  
スイッチを押せば電気がつく  
ガスを付ければ  
あったかいお風呂に入れる  
普通・当たり前が  
本当は、一番幸せ!!

## 編集後記

こんにちは。熊本地震から2年になりました。今年も花見が出来嬉しかったです。おれんじ村・おりーぶさん・にじいろさん・はあとさん達との合同で福祉センターの2階で行いました。皆さん盛り上がり、今年も花見ができて嬉しかったです。

地震の時の事を思い出すと大変だったなあと思います。ライフラインはストップし、家は倒壊し、どこもかしこもめちゃくちゃになり、余震が続く、落ち着く事も出来ませんでした。大変な毎日でした。徐々に復興していき、地震前の生活に戻っています。

おれんじ村を心配し地震直後から、全国の方々から、たくさんのお菓子のご注文を沢山いただきました。とても嬉しかったです。みなさまのご注文が、おれんじ村を救ってくれました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。